

子どもたちの安心・笑顔を支える環境整備と人材育成をめざして －特別支援学校のセンター的機能の取組－

加西市立九会小学校
教諭 高見 裕子

1 はじめに

兵庫県教育委員会において、現在、「兵庫県特別支援教育第三次推進計画」に基づき、共生社会の実現に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の更なる充実が進められている。特別支援学校のセンター的機能を効果的に発揮し、各幼保園、小・中学校、高等学校等において、校園内支援体制の充実や特別支援教育の視点からの指導・支援が求められている。

本稿では、前任校（加西市立加西特別支援学校：以下、特別支援学校）において、平成 23～26 年度に取り組んだセンター的機能の取組について報告する。

特別支援学校でのセンター的機能の取組は、大きく分けて以下の 2 つの支援に分類して取り組んだ。

<p><校内支援></p> <ul style="list-style-type: none">・教職員の専門性の向上・保護者支援の充実・医療・福祉・労働機関との連携・地域への啓発活動	<p><地域支援></p> <ul style="list-style-type: none">・幼保園・小・中学校への支援・交流及び共同学習の実践・関係機関との連携・教育相談・情報発信の充実
---	---

校内支援・地域支援共に、多様な教育的ニーズに応え、どの子にも分かった・できたという達成感が得られる教育環境の整備を推進していくために、教職員の特別支援教育に関する専門性を高めていくことが大切であると感じた。この点においてセンター校として、様々な特別支援教育に関する研修機会の提供や特別支援教育を推進していくための核となる人材の育成に力を注いでいくことが重要であると考えた。

2 取組の内容・方法

(1) 自主研究活動「幼児期支援研究会」

加西市立総合教育センター（以下、総合教育センター）と連携し自主研究活動「幼児期支援研究会」を開催した。主に市内幼保園の特別支援児を担当する教員・保育士を対象に、子どもたちのニーズに応じたよりよい支援や配慮等を行っていくために、特別支援学校の教育支援部員が講師を務めたり、大学や専門機関等から講師を招いたりして、障害特性理解のための研修や事例検討、実技研修等、専門性を高めるための研修会を年間 6 回実施した。

① 研究の概要（一部を抜粋）

H25 年度	内 容	講 師
8 月 1 日	学習会「障害特性について」 ・ ADHD の特性について（DVD 視聴） ・ 本校開催の教材・教具展見学	加西特別支援学校 教育支援部員
9 月 5 日	インシデントプロセス法による事例検討会 ・ 現在困っているケースの検討について	県立特別支援学校教諭
11 月 26 日	インシデントプロセス法による事例検討会 ・ ことばの指導について	言語聴覚士
1 月 14 日	実技研修会 他 ・ 子どもの運動能力や模倣の力を高める体操・手遊び歌 ・ 担当園児の現状と支援について	加西特別支援学校 教育支援部員

（2）総合教育センター研修講座への講師協力・会場提供

総合教育センターにおいて、教科指導や様々な教育課題に対応するための各種研修講座が開催されている。「特別支援教育研修講座」をはじめ、特別支援教育に係る講座は、特別支援教育への理解を深め、よりよい指導・支援を行うための教職員の研修の場となっている。

特別支援学校では、上記の特別支援教育に係る各種研修講座への講師協力と会場提供を行い、市内教職員の専門性の向上に一役を担った。

個別の指導計画作成の手順

- ・ 実態把握、情報収集（本人・保護者の願い等）
- ・ 目標の設定（長期・短期）
※あまり欲張らずに、達成可能な目標に！
- ・ 手立て（支援の内容・方法）
- ・ 評価
- ・ 見直し

さらにより支援へ！



資料 1 発達支援教育講座 スライド
「個別の指導計画の作成について」

写真 1 特別支援教育研修講座

（3）小・中学校での特別支援教育研修会への協力

校内研修会における研修協力という形で、市内外の小・中学校を訪問し、依頼されたテーマに沿った研修会を行った。ここでは、市内中学校から依頼を受けた特別支援教育についての校内研修会の事例を紹介する。研修会では「インクルーシブ教育システム構築に向けて」というテーマで話をさせていただいた。

最初にインクルーシブ教育システムの概要について説明し、キーワードとなる「合理的配慮」や「基礎的環境整備」「教職員に求められる知識・技能」などについて、ス

ライドを用いて説明を行った。

次に、具体的な実践例として、下記の内容を挙げた。

- ・特別支援教育の視点を活かした学級経営や授業づくり
- ・授業内容の構造化
- ・ICT機器の効果的な活用

これらの実践において、実際にどのような工夫や配慮ができるかを紹介し、参加者に支援や授業づくりについての具体的なイメージが持てるようにした。

最後に、通常学級の特別な支援が必要な生徒の実際の支援に活かすために、「来学期からすぐに取り組めること」を付箋に書いてもらい、KJ法を用いて学年団毎に分類・整理し、支援や連携体制の確認を行った。

通常学級の特別な支援が必要な生徒への支援について

- ・2学期から実現可能な支援・連携体制等を3つ付箋に記入する。(3分間で)
- ・1枚につき1項目
- ・端的にまとめて記入

学級でのルールを明確にし、掲示する。

保護者と連絡を取り合い、連携を密にする。

資料2 ワークショップ スライド

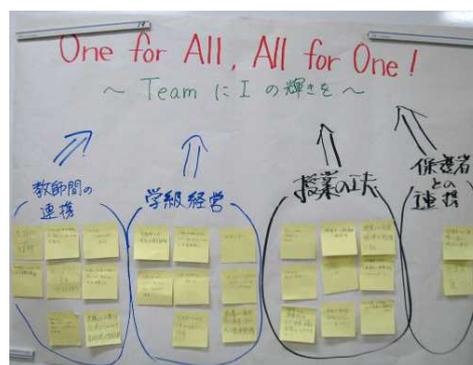
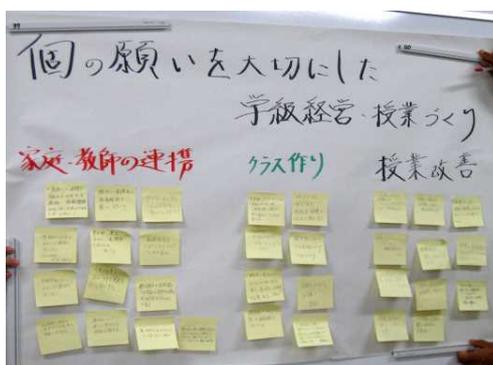


写真2, 3 市内中学校校内研修会 ワークショップ

3 取組の成果

(1) 自主研究活動「幼児期支援研究会」

(参加者の感想より)

- ・インシデントプロセス法を用いた事例検討会が大変勉強になった。悩みを聞いて頂き、その場でアドバイスをして頂けるという点が良かった。その日に教えて頂いたことを翌日からやってみることができるという点で、成果が出やすかった。
- ・9月と11月に行った事例検討会では、自分が担当している子どもについての悩みだけでなく、他園の先生方が悩まれていることも客観的に聞くことができる機会であったので良かった。また、自分の担当の子どもだったらどうだろうと置き換えて考えることで、支援方法を見直すこともできた。
- ・担当する園児の支援を工夫することによって、偏食が改善されてきており、成長を感じる。



写真4 事例検討会の様子

- ・少人数でひとりひとりの思いや意見を交流できる場であったことがよかった。自分が担当している園児について直接アドバイスをもらい、まず、どんなことでも話を聞いてもらえることがうれしく安心もできた。

研究会参加者が、市内担当者会等で子どもの実態や特性を的確に捉えた発言をされたり、他の教員にアドバイスをされたりしている様子を見る中で、地域で特別支援教育を推進し、リーダーシップを発揮できる人材育成に寄与することができたと感じた。

(2) 研修講座への講師協力・会場提供

会場を特別支援学校で行うことにより、研修で来校された参加者に特別支援学校での実践や取組を容易に目にしてもらいやすい環境を作ることができた。また、教材備品や書籍等の貸し出し依頼にも即座に対応することができた。さらに、講座を通じて参加者との距離が近くなり、日頃悩んでおられることを気軽に相談してもらえる関係性ができたことにより、担当されている子どもたちの支援に必要な情報や資料等の提供につながった。

(3) 小・中学校への研修協力

事例で挙げた市内中学校の研修会では、参加者全員が大変熱心に研修に取り組まれた。ワークショップでは、わかりやすい板書の工夫や落ち着いた雰囲気集団にするための環境整備など、具体的な支援の提案が多数出され、それらの情報を共有することができた。

上記3つの取組は、特別支援学校の教育支援部をはじめとする教職員と協力し、効果的な研修を行うための様々な案を検討し、それぞれが得意な分野を活かしながら役割を分担して行ったことで、チームで得られた大きな成果であると言える。また、大学や専門機関と連携することにより、多方面の分野の専門家を講師として招聘することが可能となり、研修の幅を広げることができたと感じている。

4 課題及び今後の取組の方向

現任校に赴任し、センター校としての取組とは異にするが、特別支援教育コーディネーターとして、以下の3点が今後取り組むべき課題であると捉えている。

- ・特別支援教育の視点を活かしたユニバーサルデザインの授業づくり
- ・交流及び共同学習の充実
- ・一貫した指導・支援を行うための幼保園・学校・関係機関との連携

また、その課題解決に向けた一歩として、

- ・通常学級での支援や合理的配慮、授業づくりの提案
- ・交流及び共同学習の方法や内容の提案
- ・関係機関との連携強化・拡充

上記の取組を一つ一つ具現化し、子どもたちの安心・笑顔で学べる環境を整え、教職員や保護者、関係機関と連携しながら進めていきたい。